

地域の会 福島第一原発視察概要

視 察 先	福島第一原子力発電所
視 察 月 日	平成20年2月24日(日)・25日 (月)
視 察 内 容	<p><福島第一原子力発電所></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1号機視察 ・ キャスク保管庫視察 <p><福島県原子力発電所所在町情報会議との懇談会></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フリーディスカッション
参 加 者	<p>－委員－ 新野・浅賀・伊比・加藤・金子・上村・川口・佐藤・三宮・高橋(武)・高橋(優)・千原・中沢・前田・宮島・吉野委員・・・・・・16名</p> <p>－オブザーバー－ 東京電力 伊藤技術担当・守GM・杉山副長 柏崎市 藤巻主任</p> <p>－事務局－ 柏崎原子力広報センター 押見事務局長・木村</p>
24日 情報会議参加者	<p>－富岡町生活環境課－ 白土課長・植杉係長</p> <p>－情報会議委員－ 猪狩副議長・安藤委員・佐藤委員</p>
25日 福島第一原発参加者	<p>大出発電所長 北村副所長 原口広報部長 大山第二運転管理部燃料GM 山本高経年化プロジェクトGM</p>

◆ 白土課長より情報会議について説明

- ・ 平成14年8月の東電不祥事を契機に、東電より発足の要請を受け設立。
- ・ 所在町より各5名ずつ選出し、発電所長2名も委員として参加している。
- ・ 会議は年間5回、開催している。

◆ フリーディスカッション

〈国・企業に対する思い〉

情報会議委員

- ・ 地震後、柏崎刈羽原発は止まっている。運転再開は先だと感じているが、保安院がGOと言った場合、保安院を信用できるか。保安院と東電の関係で、馴れ合い的な不安はないか。

地域の会委員

- ・ 広報センター理事長である柏崎市長より委嘱されているという責任を感じて活動している。保安院が技術的な安全のGOを出したとしても、そこに安心は入っていない。これから同時進行で進められるものだろうと考えているので、保安院がGOを出したからと言って、全員がGOとはならないと思う。委員の思いを会議でオブザーバーに聞いてもらっているのだが、オブザーバーの聞き入れる姿勢によって、取り方が随分違ってくる。東京まで、地元の思いが伝わるかどうか大きな問題だと考える。
- ・ 原発を造るには耐震設計審査指針があって、S1とかS2を超えて地震がくることは、造る前に想定できなければならなかった。想定できない状態で柏崎刈羽に原発を造ってはいけなかったと思っている。推進してきた人もやみくもに運転すればいいという考えではないはず。国を信用する・しないということに関しては、どうかなあという思いがある。

〈双方の会について〉

情報会議委員

- ・ 情報会議の委員は、推進的な立場の人たちが多く、そういう団体の代表がメンバーに選ばれており、そこらへんが不満である、このような会議は馴れ合いでやっては困ると思っている。原発には慎重という方々もメンバーに入っている地域の会は良い会だと思う。

地域の会委員

- ・ 地域の会の活動を地域住民に知ってもらおうというのも大きな仕事の一つだと思っていて、今後の課題の一つでもある。

情報会議事務局

- ・ 議会と情報会議との絡みの問題も今後の課題。発電所と共存共栄していく中で何をしていかなければならないかというのが情報会議の課題だと考えている。

地域の会委員

- ・ 行政当局が事務局をすると、議会と絡む問題があったのだろうが、地域の会は外郭団体が事務局をしているので、ワンクッションになっているように思う。何の権限もないというところで、

議会とは別の位置付けになっている。

地域の会委員

- ・ 情報会議はメディアに公開しているのか。

情報会議事務局

- ・ 公開している。メディアが来なくなったらおしまいかなとも思う。

〈情報に対して〉

地域の会委員

- ・ 会の委員は推薦母体がある。広い意味でエネルギーに関係した活動をしている団体からの推薦となっていて、安心・安全に特化して活動している。地域貢献的な議論はしていない。推進の立場の委員も安心・安全に絡んで意見する場が多くあるので、厳しい意見の会議になるのはやむを得ない。時には、反原発の団体と誤解を受けるのだが、けしてそうではない。ただ、反原発の方に対しても、情報量の多さや勉強する姿勢に他の委員も感銘を受ける部分は多い。

情報会議委員

- ・ 国や県、保安院、東電からの資料のみでの議論となるので、反対派の情報も入る中で議論できることはうらやましい。エネルギーの関係とは離れたところにいるので、勉強するにあたって非常に厳しい部分もある。

地域の会委員

- ・ 地域の会も原子力を学問的にわかる人は数名であり、それも部分的なものであると思う。住民の会であるので、安心のほうに重点が置かれがち。国や企業はこれまで安全という部分をやってきたので、安心というコミュニケーション的な部分に関しては、会としても訴えてはいるが現在はまだ過渡期だと考えている。
信頼し合えるためには、情報と情熱で繋がっていくことが大切であって、学問的なものは二の次。ただ、事実に基づいて感情を動かさなければならないということが大切なので、時には技術的な勉強は必要となってくる。
- ・ 自身の生活の中で疑問点を持つということでもいいのではないかと思う。

情報会議委員

- ・ 国、自治体、企業から資料をもらったとき、何が正しいのかという判断を自分自身でつけられない事がある。

地域の会委員

- ・ 会でも、違う立場の教授から講演してもらったことがあるが、違った考えを委員1人1人が聞く中で、個人が判断していくようにしている。

〈会の運営に関して〉

地域の会委員

- ・ 情報会議は、運営費は100%東電持ちなのか。

情報会議事務局

- ・ 立地四町の原子力広報・安全等対策交付金で情報会議が運営されている。

地域の会委員

- ・ 東電関係者がいても、四町からお金が出ているということであれば、知識を得るための勉強会はできるということか。

情報会議事務局

- ・ できるが、幹事会で企画を立てるといことがあるので、難しい部分もある。

地域の会委員

- ・ 地域の会は委員の中の運営委員が中心になって、全ての活動を検討しているので、その点は情報会議と大きく違う点。

〈安全・安心・信頼〉

地域の会委員

- ・ 反原発の人に対して、やはり正しい知識を持っていると感じる部分はある。だからといって、推進側と意見が一緒になることはないのだが、事実を知る上では非常に勉強になる。安全・安心については、安全であればいいという考えなのだが、でもちょっと足りないではないかと思う。
- ・ 安全であると断定できれば何の問題もない。信頼がないと、安全も安心にはならない。

情報会議事務局

- ・ 原子力に関しては言い過ぎということはないと考える。いろんな立場の人がいる地域の会はある種の抑止効果を持っていると思う。

〈高経年化と情報公開〉

地域の会委員

- ・ 福島は柏崎よりも10年以上古い。柏崎でも老朽化のことを考えている時に地震が起こった。福島ではいろいろ取り替えたという話を聞いたが、そういった部分も含めて25日は視察してきた。

情報会議委員

- ・ 美浜では27年で配管を取り替えている。原子炉本体は法令点検であり、配管は自主点検。自主点検では何年で取り替えるという決まりはない。定検の結果で取り替えるということは10年で取替えなのか、20年で取替えなのかかわからない。

地域の会委員

- ・ 情報公開はそういったことも含まれるはず。住民の気持ちを踏まえた情報公開という点でいろいろと議論させてもらっている。
- ・ 地域の会は平常時においても、いい緊張感を持った存在であるための会。

〈複合災害〉

地域の会委員

- ・ 原発の事故と地震が同時に重なるという原発震災という言葉がある。今回、柏崎では緊急炉心冷却装置まで使って止めた現実がある。さらに大きな地震がきたとき、本当に止まるのかという問題を見せ付けてくれたのが今回の中越沖地震だったと思う。原発震災を想定した防災計画を整備しなければならないということは、今後、保安院に強く言っていかなければならない問

題だと思うので、福島でも声に出してもらいたい。

- ・ 今回は原発震災でなかったのに、オフサイトセンターは動かなかったが、今回のような場合でも動くべきだった。

情報会議事務局

- ・ これまでは複合的なものは考えてこなかった。今後は複合的なものを考えていかないといけない。

地域の会委員

- ・ 維持基準も追い詰められてから表面化する、震災にあつて、これだけのことがあつて初めて複合災害といったことがクローズアップされる。こういったことは考えれば、当然わかっていたはず。それを 30 年も 40 年も経って、今頃初めて気づいたというような姿勢が住民の不信をかう。こういうことがあるということをしちんと伝えることが大切。柏崎だけが言うだけでなく、他の場所でも同じようなことが考えられるのであれば、正当な国民の権利として言うべきことは言っていってほしい。
- ・ 推進の立場だが、今回の地震では東電は緊急対策室に入れなかった件に関しては、3 年前の地震の際に、通報のことはさんざん言ってきたのになぜ改善されなかったのかという思いがある。

〈地震をふまえて〉

情報会議委員

- ・ 設置許可に疑問がある。浜岡は耐震補強工事を始めている。新潟でも今回の地震を受けて、設計の段階で弱いものであるなら、運転再開の前はかなり強度な補強工事をするべき。

地域の会委員

- ・ 海底断層が明らかになったのであれば、S1 を超えているにも関わらず、S2 を超えてなかったから大丈夫ということで発表しなかったとする発言のように、ごまかしの事をされると基本的に信用ならない。
- ・ 強度の 3 倍の地震に耐えたということは、ある意味、東電や保安院が言っていた安全は確保されたと思っている。これ以上の証明はないと思う。

〈委員、住民としての思い〉

地域の会委員

- ・ 企業に対する信頼の議論があるが、信頼したいとする前提があることはわかってもらいたい。

情報共有委員

- ・ 原発に反対しているわけではないが、安全でなければならないと思っている。

地域の会委員

- ・ そのことを一番わかってもらいたいのは、国と企業に対してである。国と企業を信頼したくないと言っているのではなく、信頼させてもらいたいという思いで、いろんなことを要請している。

◆ **大出發電所長挨拶**

- ・ どんなプラントも古くなっていく。その間どういうメンテナンスをして安全を確保していくかが重要。福島で培った技術、メンテナンスの技術、どんな経験をしたかといったことが重要になってくる。柏崎刈羽を始め、全国の発電所で共有できるようデータを提示していくことが自分たちの役目ではないかと考える。古いプラントではあるが、部分的には、一番新しくなっているところもある。

原子炉圧力容器の中までの点検が可能な現代、今後、中の機器のほとんどの部分で交換は可能になっていくと考える。新旧の機器のバッティングをどのようにしていくかが、我々の技術力であり、今後のメンテナンスに非常に重要なものとなってくる。

高経年化プラントについては、交換できないものの運転状況を把握し、健全性を確保して、どのように説明していくかが今後の仕事だと考える。

柏崎で対応していることは、福島でも対応しており、現在、地盤調査なども情報公開しながら進めている。柏崎刈羽とも連携を密にしながら、福島でのメンテナンスの経験等を柏崎にも反映させていく。

◆ **原口広報部長より福島第一原子力発電所概要説明**

- ・ 浜通り地方に 23 基の発電所があり、そのうち 15 基が東京電力の発電所。
- ・ 保全活動
13 ヶ月に 1 回の定期検査。
プラントは 30 年を迎える前に、「高経年化技術評価」を実施。評価結果に基づき、10 年間の「長期保全計画」を策定し国へ提出。国が妥当性を評価する。
- ・ 供用期間（寿命）
法的な寿命はない。的確なメンテナンスにより、60 年間の運転が可能と評価されている。
- ・ プラント状況
現在 70%の稼働率。
使用済燃料は 1 万 6000 体貯蔵でき、現在は 9000 体ほど。

◆ **質疑応答**

〈安心・安全の理解活動〉

地域の会委員

- ・ 情報会議の方と懇談したが、福島の方は原発に対して理解しているように感じた。電力として地元への情報理解のために、どういう働きかけをしているのか。
福島第一の 469.6 万 kW という発電量は、東電の総発電量の何%くらいか。東京の方への供給はいかほどか。また、東京の方の理解はどの程度か。

東京電力

- ・ 情報は時間をおかず、タイムリーなものを新聞折込みなどで広報している。福島でも中越沖地震のようなことが起こるのか、起こったらどういう影響があるかということを住民は気にかけて

いる。説明により理解してもらっている。行政にも説明を聞いてもらい、地域の方と接触することを心がけている。

福島第一での発電電力量は東電の1割を占める。電力消費地の方の原発の理解活動として、東京で電力の生産地である福島を紹介するイベント等を行っている。

地域の会委員

- ・ 福島第一の1号機はすでに37年という年数が経っている。地震後も柏崎では原発理解していない部分も多いのだが、これだけの年数が経っている福島で、安心・安全に関する計画的なものがあれば具体的に聞かせてもらいたい。

東京電力

- ・ 今回の地震後、住民の方へアンケートをとらせてもらった。結果、火災に関する消火設備の問題、放射性物質の放出に関する心配などが見られた。これらに関する説明をするとともに、消防車の整備を行った。消防に対する不安は減ったようだが、地質調査に関する心配が増えていることを受け、今後説明していきたいと考えている。

〈建設予定の発電所〉

地域の会委員

- ・ 7,8号機が建設予定ということだが、具体的に教えてもらいたい。

東京電力

- ・ 19年6月には双葉町議会で増設計画の凍結が解除された。但し、14年東電不祥事の際、所在4町協議会が増設計画を凍結しているので、それが凍結解除されなければ増設計画は進められない。

〈高経年化〉

地域の会委員

- ・ 古いプラントも現在では、技術の進歩により逆に新しい部分もある、という説明があったが、37年経ってどれくらい交換しているのか。最終的に、どれくらい使用できると考えているのか。柏崎では、建屋の傾きのデータを取っているが、福島でもデータを取っているのか。

東京電力

- ・ 1号機については、炉内構造物シュラウド、給水加熱器、主要変圧器等、主だったものを交換している。13ヵ月に1回の定期検査にて、全ての機能の健全性が確認できれば、次の定期検査まで運転できることになる。また、運転30年目を迎える前に高経年化技術評価を行っている。今後10年間の長期保全計画を策定し報告書として取りまとめ、国へ提出することになる。国がその報告書の妥当性を評価することになるが、これまでの評価では的確な保守管理により、仮に、60年間の運転は可能と評価されている。但し、プラントを何年運転するかは事業者任せられており、実際の運転年数は、プラント毎に総合的に評価していくこととなる。建屋の傾きの件は、別途回答させていただく。

〈地盤調査〉

地域の会委員

- ・ 福島でも断層があると聞いていて、東電の方でも地盤調査をやっているとのこと。海底調査等の計画があるのか、どれくらい進んでいるのか教えてもらいたい。

東京電力

- ・ 海域については、福島第一、第二の海側。沖合約 35 キロ、南北約 90 キロにおいて海底の音波探査を行っている。陸域は、福島第一、第二の海側から山側に向かって 5 本の側線を測定。発電所構内外でボーリングによる地質調査を実施。

海域調査はほぼ終了していて、陸域については 5 本の側線のうち 4 本が終了している。構内の浅いボーリング調査についても終了している。

現在、構内の 1 キロくらいの深いボーリングを実施している。進捗状況は 3 月に地質調査の中間報告をする予定となっている。

〈資料要望〉

地域の会委員

- ・ 地震後の対応として、住民説明したときの資料があれば、後日見せてもらいたい。

〈発電所の機器交換に関して〉

地域の会委員

- ・ 再循環系のひびなど、いろいろと取り替えたとのことだが、何号機のどんな部分を取り替えたのか。取替えの基準はどういうことなのか。柏崎では取り替えていないのだが、柏崎との違いはどんなことなのか。

東京電力

- ・ シュラウドについては、1,2,3,5 号機で取り替えている。再循環系配管については、1 号機では全て取り替えている。

〈教育界への取組〉

地域の会委員

- ・ 柏崎では復興計画を策定中。その参考にしたいのだが、福島では小中学校に対する放射能教室職場体験を行っているという説明があったが、これは希望者に対してのものなのか。

東京電力

- ・ 電気教室、放射線教室は、学校側とタイアップし、対象学年、全ての生徒に対して行っている。職場体験については希望者に対して行っている。